

令和4年3月31日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所	福島県福島市杉妻町2番16号
管理機関名	福島県教育委員会
代表者名	教育長 鈴木淳一

令和3年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業に係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

- 1 事業の実施期間
令和3年4月1日（契約締結日）～令和4年3月31日
- 2 指定校名・類型
学校名 福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校
学校長名 柳沼 英樹
類型 グローカル型
- 3 研究開発名
原子力災害からの復興を果たし、新たな地域社会を創造するグローバル・リーダーの育成
- 4 研究開発概要
○カリキュラム開発：カリキュラム全体の柱として学校設定科目「地域創造と人間生活」と「未来創造探究（総合的な探究の時間）」で3年間を貫き、地域課題解決の探究と海外研修を体系的に位置づけ、地域と世界の課題解決に貢献する資質・能力を育成するとともに地域に貢献する人材としての在り方生き方を涵養するカリキュラムを開発する。
○地域課題解決に貢献する人材育成：地域・世界が直面する困難な課題を理解し、自らの在り方生き方を考え、また実践を重視した地域課題解決の探究を行い、その解決に貢献できる人材を育成する。
○双葉郡との広域連携による教育と復興の相乗効果を創出し、全国へ発信する。
- 5 学校設定教科・科目の開設、教育課程の特例の活用の有無
・学校設定教科・科目 開設している
・教育課程の特例の活用 活用している

6 運営指導委員会の体制

氏名	所属・職	備考
田熊 美保	経済開発協力機構（OECD）教育局 教育訓練政策課シニア政策アナリスト	教育政策国際比較、教育政策評価、Education2030
飯盛 義徳	慶應義塾大学総合政策学部教授	プラットフォームデザイン、地域イノベーション
田村 学	國學院大學人間開発学部初等教育学科教授	総合的な探究の時間の指導、カリキュラム研究

7 高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者
双葉郡教育復興ビジョン推進協議会（双葉郡浪江町教育長、双葉郡教育復興ビジョン推進協議会及び双葉地区教育長会 代表）	笠井 淳一
福島大学人間発達文化学類特任教授	中田 スウラ
公益社団法人福島相双復興推進機構（福島相双復興官民合同チーム）専務理事	桜町 道雄
公益財団法人福島イノベーション・コースト構想推進機構 教育・人材育成部長	山内 正之
認定NPO法人カタリバ 双葉みらいラボ拠点長	横山 和毅
福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校長	柳沼 英樹
福島県教育委員会 教育次長	丹野 純一

8 カリキュラム開発専門家、海外交流アドバイザー、地域協働学習支援員

分類	氏名	所属・職	雇用形態
カリキュラム開発専門家	横山 和毅	NPO法人カタリバ 双葉みらいラボ拠点長	非常勤
海外交流アドバイザー	島田 智里	ニューヨーク市役所公園局 都市計画&GIS スペシャリスト	非常勤
地域協働学習支援員	平山 勉	双葉郡未来会議 代表	非常勤

9 管理機関の取組・支援実績

（1）実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
各種事業の支援	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
関係機関との連携	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
運営指導委員会						○				○		
コンソーシアム						○				○		

(2) 実績の説明

①管理機関における主体的な取組について

- ・ 教員加配による支援
- ・ 海外研修費に係る費用の支援
- ・ 探究活動や外部講師活用に係る費用の支援
- ・ 運営指導委員会、コンソーシアム協議会の開催
- ・ 県主催各種発表会や研修会の開催
- ・ 成果の普及（アクティブラーニングをテーマに研修会を実施し、ふたば未来学園の取組が普及している）

②事業終了後の自走を見据えた取組について

- ・ コンソーシアムの構築
- ・ 費用面での支援の可能性を検討

③高等学校と地域の協働による取組に関する協定文書等の締結状況について

- ・ コンソーシアムについて、要項を作成し、趣旨を共有した。

10 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1年「地域創造と人間生活」における地域探究学習、国際理解学習	4回	1回	2回	2回	1回	5回	6回	2回	3回	3回	2回	2回
2年「総合的な探究の時間」における地域探究学習	3回	3回	4回	3回	1回	5回	4回	2回	3回	2回	2回	2回
3年「総合的な探究の時間」における地域探究学習	3回	3回	4回	3回	1回	5回	3回	3回	2回	2回		
研修（生徒）	1回									2回	1回	3回
発表会、交流会等	1回					1回	1回	1回	1回	3回	1回	1回
研修（教員）	2回	2回	1回			1回		1回	1回	1回	1回	

(2) 実績の説明

①研究開発の内容や地域課題研究の内容について

○1年「地域創造と人間生活」における地域探究学習、国際理解学習

- ・ 地域を知るための導入講座（事前調査、プチ課題探究、フィールドワーク、振り返り）
- ・ 思考を整理するためのスキル学習（マインドマップ講座）
- ・ 地域を深く理解するための演劇創作（バスツアー、地域住民へのインタビュー、演劇の手法を用いたコミュニケーションワークショップ）
- ・ 国際理解講座（イラクが抱える課題事例から国際的な課題を捉える講座、SDGsによる国際的な課題と地域課題との接続）
- ・ 地域探究活動への導入講座（地域で活動している方によるヒューマンライブラリー等）

○2年「総合的な探究の時間」における地域探究学習

- ・ 地域探究活動オリエンテーション（課題の捉え方、課題設定の方法、仮テーマ設定）
- ・ 地域探究活動（テーマ設定、ゼミ配属、調査アクション、課題解決アクション）

○3年「総合的な探究の時間」における地域探究学習

- ・地域探究活動（課題解決アクション）
- ・論文作成（論文ルーブリックを作成し、それに基づく論文指導を行った）

○研修（生徒）（海外研修については感染症対策のため国内代替研修を実施）

- ・英語活用力養成のためのブリティッシュヒルズ研修（1，2年）
- ・環境問題を捉えるための徳島研修（1年）⇒徳島研修を中止し、SDGsに関する学習や古着リサイクルを行うNPO法人の理事長との対話、イラク戦争の難民理解のためのオンライン哲学対話で代替
- ・ドイツのErnst Mach校との福島や世界の課題に関する対話研修（1年）
- ・国連UNIS-UN研修（オンライン、2年）
- ・国連職員との福島や世界に関する課題に関する対話研修（オンライン、2年）【令和4月4月実施予定】
- ・課題の伝承に関する研修（広島研修、2年）

○各種発表会、交流会への参加等

- ・生徒研究発表会（9月、中学校3年生および高校3年次による地域課題探究発表会、中学校16発表、高校58発表のうち代表32発表）
- ・プレ発表会（10月、2年生によるテーマ設定の報告会、72発表）
- ・ふたばアワード（11月、1～3年による学年横断型の地域課題探究発表会、18発表）
- ・演劇を通して地域の課題を知る学習成果発表会（12月、16発表）
- ・ふくしま高校生社会貢献活動コンテスト（10月、福島県内高校生対象の発表会、本校から4件応募、優秀賞2本、入選1本、福島大学アドミッションセンター賞1本）
- ・ふくしま学（楽）会（8月および1月、早稲田大学が主催する産官学による地域復興に取り組む学会、本校から7発表、パネリストとして生徒8名が登壇。）
- ・Glocal High School Meetings 2022（1月、本事業（グローバル型）に指定された高校による探究活動コンテスト、日本語発表部門1件、英語部門1件発表、日本語発表部門で金賞（生徒間投票特別賞）、英語発表部門で金賞（探究成果発表会特別賞）を受賞）
- ・第21回福島県総合学科高等学校生徒研究発表会（1月、本校から2件発表）
- ・マイプロジェクトアワード福島県 summit（1月、福島県内高校生対象の発表会、本校から10件応募、このうち1件が福島県代表として全国 summitへ進出）
- ・マイプロジェクトアワード全国 summit（3月、福島県代表として1発表）

○研修（教員）…本校では「未来研究会」と呼称

- ・地域を理解するためのバスツアー（4月、着任者オリエンテーションとして実施）、オンライン教育についてのスキル習得、クロスカリキュラムの検討、本校の課題の共有、地域との協働の在り方に関する講義、1年間探究活動等の総括等（6回実施）

②地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け

（各教科・科目や総合的な学習（探究）の時間、学校設定教科・科目等）

- ・「地域創造と人間生活」（1年全員対象、2単位で実施）
- ・「総合的な探究の時間」（本校では「未来創造探究」として実施）（2、3年全員対象、各学年3単位 合計6単位で実施）

③地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させ、

教科等横断的な学習とする取組について

- ・教員研修としてクロスカリキュラムの企画を全教員で実施し、各科目での授業において以下のような取組を行った。
 - ・英語の授業においてバナナペーパープロジェクトについて学び、地元の特産品であるバナナについて理解を深めた。
 - ・音楽の授業について、情報科の教員と協働して著作権について学習した。その際に、一人一台端末を用いて Google の JamBoard で著作権の権利を守るため必要な提言を作成した。

④地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制

- ・本校では「変革者」の育成を教育目標とし、これを実現するために「自立・協働・創造」の力の育成を掲げている。これらの力を育成する要件として11項目5段階のルーブリックを策定し（令和3年4月に10項目から11項目にルーブリックを改定）、これに基づきカリキュラム・マネジメントを行っている。教育活動の柱として探究活動（「地域創造と人間生活」「総合的な探究の時間」）を推進し、その主要なテーマとして地域課題を取り上げている。そのため、地域との協働による探究的な学びは本校の教育目標を実現する中心的な役割を担う位置づけとしている。

⑤学校全体の研究開発体制について（教師の役割、それを支援する体制について）

- ・校務分掌として「企画・研究開発部」を設置し、探究活動や教員研修の企画立案、運営を行った。構成要員として専属6名の他に中高の各学年担任も加わっており、全教員の15%ほどを占めている。また、学校内に常駐しているNPO法人カタリバのスタッフにも探究ゼミの運営やカリキュラム開発のための会議等に参加していただいている。
- ・1年生の活動（探究活動の導入）は、1学年担任と企画・研究開発部の担当者によるチームで指導した。2、3年生の活動（探究活動の実践）は6つのゼミに分かれて実施した。各ゼミは各学年の担任、教科担当者からなる3名程度の教員チームが担当し、生徒の指導にあたる仕組みを構築した。これによりほぼ全ての教員が探究活動に関わった。
- ・本校の探究活動においては生徒の主体性を重視しているため、多様な生徒、多様なテーマについて教員が柔軟に対応していく必要がある。教員と生徒との関わり方については、探究ゼミ担当教員が定期的実施しているミーティング（ゼミ内ミーティング、年次ミーティング）において個別のケースをとり上げて指導、対応の在り方を検討した。
- ・「探究による実践的な学び」と「大学段階での専門的な学び」を更に強化するために、早稲田大学からポスドクを招聘し、高大リエゾンマネージャーを置いた。

⑥カリキュラム開発等専門家、海外交流アドバイザー及びの学校内における位置付けについて

- ・カリキュラム開発等専門家については毎週実施の本校の企画・研究開発部の定例ミーティングに出席していただいた。「地域創造と人間生活」、「総合的な探究の時間（未来創造探究）」の企画立案、探究指導のための担当教員ミーティングの企画立案、生徒の指導方法、教員と生徒との関わり方、評価の在り方の検討、学校内外の発表会の検討、先進校の状況の共有等について協議いただいた。
- ・海外交流アドバイザーについては、今年度コロナ感染防止対策の観点から海外での実地研修が行えなかったことから、あまり関与していただく機会がなかった。

- ・地域協働学習実施支援員については、地域を知るためのバスツアー、演劇、課題研究実践についての協議、地域を熟知している講師の選定や事前授業について相談させていただいた。また実践の場の提供、活動の地域への周知、地域の協力者の紹介等、生徒が地域に踏み込みやすい環境作りにも協力いただき、地域と本校の強力な仲介役を担っていただいた。さらに自ら地域の案内役や発表会の審査員として、多くの取組みにご協力いただいた。

⑦学校長の下で、研究開発の進捗管理を行い、定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ、計画・方法を改善していく仕組みについて

- ・研究開発の進捗については、以下のような教員チームによるミーティング等の機会を活用して情報共有、評価、改善策の検討を行った。
 - ・職員会議（月に一度）
 - ・企画・研究開発部（15名程度）による定例ミーティング（週に一度）
 - ・各学年の探究担当者（各学年20名程度）による月次会（月に一度）
 - ・2、3年の各ゼミ担当者（各3名程度）による定例ミーティング（週に一度）
- ・生徒の資質能力の状況については、年に2回ルーブリック評価を行い、その動向について企画・研究開発部が集約、分析を行い、探究担当者との共有、対策検討等を行った。
- ・生徒一人ひとりに対しては、ルーブリック評価をもとに、2年生以降は各ゼミ内での生徒同士によるピアレビューや担当教員との面談（ルーブリック面談）を行い、生徒自身の活動の振り返りや目標設定の契機となった。

⑧カリキュラム開発に対するコンソーシアムにおける取組について

- ・コンソーシアム協議会において本校のカリキュラム開発について説明し、理解を得た。カリキュラムに対しては、探究活動の課題設定段階における工夫や、普通に生活している地域の方の声を探究活動に取り入れるような活動に向かう大きな方向性について意見をいただいた。

⑨運営指導委員会等、取組に対する指導助言等に関する専門家からの支援について

- ・グローバル型の目標や育成したい生徒像を共有し、本校が「地域におけるプラットフォーム」となり、地域の創造性が生み出されることへの期待を託された。また本校はソーシャルキャピタルを活用しながら教育活動を行えているとの評価を頂いた。さらに活用するために、卒業生をうまく活用し、循環を図ることの必要性を確認した。
- ・運営指導委員の先生からは「グローバル」の捉え方について、本校に限らず日本の学校の探究学習は地域と世界を分けて考えているので、地域と世界を結びつけようという意識が強いため、「グローバルは地域と地続き」という発想を持つべきとのご指摘があった。

⑩類型毎の趣旨に応じた取組について

- ・本校は類型として「グローバル型」の指定を受けており、地域とグローバルな視点を重ね合わせた地域課題解決探究・学習モデルの構築等を目標としている。地域探究活動で捉えた課題や知見をグローバルな課題と照らし合わせる機会として海外研修を予定していたが、昨年同様にコロナ禍の影響で、今年度も海外現地での研修は実施できなかった。同様な成果を期待できるものとして、以下のような国内研修やオンライン研修を実施した。
 - ・ブリティッシュヒルズ研修（1、2年ドイツ、アメリカ研修代替、英語活用力養成）

- ・徳島研修（1年ドイツ研修代替、環境問題、ゴミ問題）
- ・ドイツの学校とのオンライン対話研修（1年ドイツ研修代替、福島と世界の課題）
- ・UNIS-UN オンライン研修（2年アメリカ研修代替、福島と世界の課題）
- ・国連職員とのオンライン対話研修（2年アメリカ研修代替、福島と世界の課題）

これらの代替研修については生徒へ丁寧に趣旨を説明した。結果的に応募状況は通常の海外研修と同様に高倍率となり、生徒達は意欲的に取り組んだ。また、研修を経て地域課題とグローバル課題の共通点を充分認識することができた。

- ・本校は平成30年度からアジア高校生架け橋プロジェクト留学生を受入れており、今年度はベトナムから1名の留学生と昨年から引き続き滞在しているミャンマーの留学生がいる。留学生の視点を生かした授業や校外活動を英語教員や学年教員が積極的に行っており、生徒はグローバルな視点を常に意識している。また、今年度はミャンマーで起こった軍事クーデタを題材に留学生と本校生徒が議論するパネルディスカッションを実施した。

①成果の普及方法・実績について

- ・活動の様子等については本校のホームページにおける公表、マスコミへの周知と各種メディアへの掲載、視察者への説明等を行い、成果の普及に努めた。
- ・生徒の課題探究活動の成果については、学校内外の発表会により普及に努めた。今年度もコロナ禍により例年のような公開での生徒研究発表会は実施できなかったが、オンラインによる公開発表を行った。その結果、185名のオンラインでの参加者がおり、遠方からの参加者も多数参加していただくことができた。（参考 令和2年度：42名）

1.1 目標の進捗状況、成果、評価

本事業の目的は以下のとおりである。

- 地域での課題解決の探究と海外研修を体系的に位置づけ、地域と世界の課題解決に貢献する資質・能力を育成し、自己の在り方生き方を見出すカリキュラムの開発
- 原子力災害特有の課題に加え、全国・世界の課題が先行して生じている地域の特性を理解し、新たなコミュニティや産業を創造し、課題解決に貢献する人材の育成
- 双葉郡との広域連携による教育と復興の相乗効果の創出、及び全国の高校への波及

上記A～Cを実現するために設定した目標と進捗状況を以下に示す。

(目的 A の目標) 総合学科の入学年次必履修科目「産業社会と人間」を学校設定科目「地域創造と人間生活（今年度より）」に代替し、困難な地域社会の現状と Society5.0 時代の変化を踏まえた能力と態度を養い自己の在り方生き方を見出すカリキュラムを開発する。

今年度の結果：

昨年度立案した計画に基づき、今年度より「地域創造と人間生活」を実施した。これまでの「産業社会と人間」の内容を精査し、次年度より中学校3年間をふたば未来学園中学校で過ごした生徒が高校に入学することを考慮して、中高6年間を見据えた年間計画の策定を行った。今年度はその繋ぎの年度として以下のような取組を行った。

- ・探究学習のスタートとして、昨年の「産業社会と人間」での授業実践で効果が認められた Will×Need×Can の3項目から自分が住む地域の課題を考え、課題解決のためのアクションについて考えさせる取り組みを今年度も実施した。自分のやりたいこと (Will) からスタートし、その後、

実際に地域で出会う様々な課題についても、その都度「自分には何ができるだろう」と考えるマインドが育った。

・地域の課題を知るフィールドワークに始まり、地域の方々の取材を通して地域の分断と対立の社会的構造を演劇で表現し、そこで明らかになった社会的構造を次年度からの探究につなげる活動を今年度は強化した。様々な価値観や背景を持つ人の集団において、相互関係を深め、共感しながら、人間関係やチームワークを形成していくトレーニングとして、演劇の手法を用いたコミュニケーションワークショップを定期的実施し、より効果的な合意形成のトレーニングとなるようプログラムを組んだ。結果として、正解のない課題や経験したことのない課題について表面的に受け取るのではなく、自分事に引き寄せて想像し、物事を多面的に捉えることができた。

「なぜ演劇を取り組むのか」を意識させ、対立構造を個人のパーソナリティに重ねるのではなく、社会構造として捉える視点をつかませることは昨年以上にうまくいった点である。

(目的 A の目標) 地域とグローバルな視点を重ね合わせた地域課題解決探究・学習モデルを構築する。

今年度の結果：以下のような取組を行った。

・イラク在住の高遠氏とオンラインでつなぎ国際理解講座を行った。「中東、イラク、イスラム、難民」に対するイメージと実際のギャップを、「フクシマ」に対する世界のイメージと実際のギャップと重ねて考えることができた。また講演者の生き方を通して生徒達が自身の在り方生き方考える機会となった(1年)。

・ドイツ研修代替研修として、「ゼロ・ウェイスト(ごみゼロ)」を掲げ、究極の持続可能な地域を追求している徳島県上勝町のゼロ・ウェイストセンターを訪問し、スタディツアーを行うと共に地域住民と交流し意見交換を行う予定であったが、計画通り進めることができなかった。そのため、いわき市で古着リサイクルや海外支援を行うNPO法人の取り組みを学習し、ミュンヘンのErnst Mach Gymnasium校の生徒とオンラインにて交流を行った。また、イラク在住のジャーナリスト高遠菜穂子さん主催の「哲学対話」に参加し、「なぜ戦争は起きるのか?なぜとめられないのか?」をテーマとして、参加者80人とともにオンラインで議論を交わした(1年)。

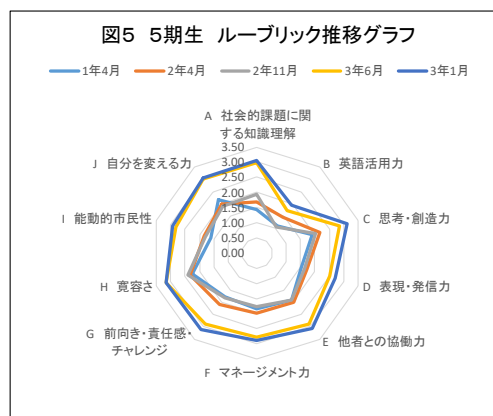
・ニューヨーク研修代替研修として、外国人向けに双葉郡バスツアーを生徒が立案・企画・実施し、双葉郡の抱える課題を英語で説明するという研修に切り替えた。本校設立の経緯および双葉郡が依然として抱える諸問題について理解を深めるとともに、英語による説明によりプレゼンテーション能力の醸成および、その後のUNIS-UNやUN職員との議論にもつながると考えたためである。今回は、APU立命館アジア太平洋大学(大分県)の留学生(国籍:中国・タイ・ベトナム・ウズベキスタン・パキスタン・バングラデシュ・パレスチナ・ウガンダ・オーストラリア)に来ていただき、3泊4日の行程(3/7-10)でバスツアーを実施した。主な見学先は浪江町請戸小学校跡地、大熊町の間貯蔵施設、富岡アーカイブミュージアム、川内村天山文庫等である。また今後は、ニューヨーク在住の国連職員とオンラインでつなぎ、自分の探究活動について発表し、国際的な課題という観点から議論する予定【4月実施予定】である。また、国連国際学校が主催する生徒国際会議(UNIS-UN)に参加し、各国の同世代や各国大使・専門家等とグローバルな課題について意見交換を行った(2年)。

・今年度の段階では確固とした学習モデルの構築について途上段階ではあるものの、生徒自身が掲げるテーマを活用してグローバルな課題に目を向ける方策は、自分事として捉えやすい点、地域課題は世界共通な課題でもあることを認識できる点、様々な視点からの見方に捉えることによって問題の本質に迫ることができる点等から、有効であることがわかった。

(目的 B の目標) 育成したい具体的な知識・スキル・人間性等を規定したルーブリックについて、3年生最後のルーブリックレベル平均値で3.5以上を実現する。

今年度の結果：今年度の3年生について、以下にルーブリックの推移データ(平均値)、グラフを示す。これまでの生徒と同様、それぞれの項目について学年が上がるごとに値が上がっており、資質・能力が順調に高まったといえる。しかし最後のアンケートの平均値は2.9となり、目標として掲げている3.5には到達していない状況である。2年次後半から、3年次前半にかけての値が大きく伸長した。

	1年4月	2年4月	2年11月	3年6月	3年1月	推移グラフ
A 社会的課題に関する知識理解	1.43	1.70	1.94	2.98	3.04	
B 英語活用力	1.11	1.44	1.06	1.71	1.95	
C 思考・創造力	1.91	2.18	2.04	2.87	3.13	
D 表現・発信力	1.52	1.72	1.64	2.51	2.69	
E 他者との協働力	1.93	2.02	1.94	2.88	3.07	
F マネージメント力	1.83	1.97	1.77	2.77	2.87	
G 前向き・責任感・チャレンジ	1.80	2.09	1.82	2.88	3.14	
H 寛容さ	2.25	2.31	2.38	3.15	3.15	
I 能動的市民性	1.62	1.81	1.78	2.81	2.92	
J 自分を変える力	2.16	1.98	1.91	3.01	3.04	
平均	1.76	1.92	1.83	2.76	2.90	



卒業生ごとの経年比較

1期生(H29年度卒)	2期生(H30年度卒)	3期生(R元年度卒)	4期生(R2年度卒)	5期生(R3年度卒)
1.99	2.63	3.10	2.62	2.90

(目的 B の目標) 地域社会への還流を見据え、地域に貢献していく在り方生き方の目標として「卒業時における、将来的な地域への貢献意識(社会との関わり)や、本事業による自身の価値観への影響の肯定的意見の割合で70%以上」を達成する。

今年度の結果：

問1 未来創造探究は、あなたが将来「社会とどう関わって生きていきたいか」を見出すことに繋がりましたか？ 回答結果：肯定的意見 87%、否定的意見 13%

問2 未来創造探究は、あなたが自分の価値観を考えることに繋がりましたか？

回答結果：肯定的意見 87%、否定的意見 13%

昨年同様に肯定的な意見が見られ、これらの結果から今年度の目標は達成できたと言える。

(目的 C の目標) 地域と協働した課題探究プロジェクト数、協働する地域の方の人数、来校する教育関係者等の人数、発表・コンテスト応募件数等について目標値を達成する。

- ・地域と協働した課題探究プロジェクト(目標：最終年度50件、今年度40件)
今年度実績：58件 … 目標達成
- ・協働する地域の方(延べ)(目標：最終年度200件、今年度165件)
今年度実績：310件 … 目標達成
- ・来校する教育関係者等(目標：最終年度250件、今年度230件)
今年度実績：192人(発表会オンライン参加者42人含む) … 目標達成
- ・発表・コンテスト応募件数(目標：最終年度45件、今年度45件)
今年度実績：58件 … 目標達成

(目的 C の目標) 地域復興・創生における高校の役割と、「教育と復興の相乗効果創出」の必要性を踏まえ、双葉郡 8 町村との広域的・組織的・実働的な協働体制をコンソーシアムで確立し 8 町村を面的にカバーするとともに、地域協働の場・機会として校舎や探究発表会を活用し、生徒の探究を通じて地域住民主体のウェルビーイング実現を後押しする。

今年度の結果：

- ・今年度のコンソーシアム協議会では開発計画の進捗状況を共有し、意見交換を行った。昨年度から双葉郡 8 町村との連携を面的に広げたので、今年度の取り組みは地域の課題を把握するためのインタビュー取材先を福島相双復興推進機構に紹介していただくなどの新たな取り組みを行うことができた。

- ・生徒の探究活動については、昨年度まで高校所在地の近隣での活動がほとんどであったが、今年度から、より広域に活動を広げることを意識した。その結果、双葉郡全 8 町村に活動を広げることができた。一方でコロナ禍により地域住民の校舎の活用や発表会への参加は大きく制限され、課題が残る結果となった。

- ・地域との協働について、今年度は次のような事例がみられた。

- ① 震災事故により休校となっている 5 校の校章をかたどったグッズを販売する際、地域の方に材料やアイデアを提供していただきながら開発を進めた。開発した商品を地域のイベント等で紹介することによりメディアなどに取り上げられ、結果的に地域の認知度向上に貢献した。

- ② 浪江町商工会青年部と本校生徒が協働し、浪江町の新たな魅力を作り・考えるセミナーを開催したり、食をテーマとしたイベントを実施したりした。計画立案から地域の大人と生徒が対等な関係で協働するプロジェクトが生まれてきている。

- ③ 地元の NPO 法人と連携して地域の拠点づくりに貢献した。拠点のデザイン等を生徒が担当し、活動を盛り上げた。

こういった事例はまだ数が少ないものの、教育と地域復興の相乗効果を具現化している好例である。今後もこのような事例を積み重ねることにより目標達成に向けて取り組みたい。

<添付資料> 目標設定シート

1 2 次年度以降の課題及び改善点

① 中高を見通した 6 年間のカリキュラム開発と探究フェイズの引き上げについて

次年度よりふたば未来学園中学校を卒業した生徒が高校に入学してくる。これまでの 3 年間での学びの蓄積を生かしながら、さらに探究を加速させていくことと高校から入学した生徒との一体性を持ちながら探究学習をすすめることの相反する状況が予想される。また、次年度は探究のサイクルを半年前倒しするため、計画の見直しを行ってきたが、その影響の評価・検証を進めながら 6 年間のカリキュラム・マネジメントを進めていきたい。

② コンソーシアムの効果的な運用による地域連携の拡大

昨年度より生徒の探究活動の範囲が双葉郡 8 町村に大きく広がった。この状態を維持しながら、探究活動の量的、質的な発展を目指していく。そのためにコンソーシアムを効果的に運用することはもちろんのこと、コンソーシアムのみには頼るのではなく他のネットワークも活用しながら地域連携を進めていく。また、地域の方にとっても本校の校舎や探究発表会が地域協働の場・機会として活用され、生徒の探究での学びと地域復興の相乗効果の創出を生み出す場づくりをめざしたい。

③ 知見の共有・発信

本校が本指定を受けて獲得してきた知見（探究学習の伴走方法などのノウハウ・カリキュラム・マネジメントなど）をどのように情報共有・発信していくかを検討していくことが必要である。まずは、本校生徒・教員が取り組んできた探究学習に関する知見を体系化することが求められる。また、この体系化された知見が県内外の学校へ発信するための準備を次年度に向けて進めていきたい。

④ 掲げている定量的目標の達成

目的を達成する指標として掲げている目標について、昨年に引き続き未達成の項目がある。活動指標（アウトプット）項目は毎年着実に達成できているが、本校の人材育成要件であるルーブリックの値については、最終年度には目標達成できるように取り組みたい。とはいえ、この数値はあくまで生徒の資質能力を伸長させるガイドに過ぎないため、数値に囚われすぎず、生徒の実践内容や活動の様子を丁寧に見ながら指導を進めたい。そのためには教員と生徒との関わり方について教員側が知見を深めていく必要がある。本校では教員のチームによる指導体制がある程度確立されており、この体制を活かして生徒の指導力を向上させたい。

⑤ 自走に向けた方向性について

地域との協働事業指定終了後についても、国や福島県のような施策を活用しつつ、福島県教育委員会の指導の下、引き続き取り組んでいく。

【担当者】

担当課	高校教育課	TEL	024-521-7773
氏名	赤岡奈津美	FAX	024-521-7973
職名	指導主事	e-mail	akaoka.natsumi@fcs.ed.jp